How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 2

# 生活絵引と菅江真澄

## Pictorial Explanation and SUGAE Masumi

菊池　勇夫（宮城学院女子大学学芸学部　教授／共同研究員）　KIKUCHI Isao

三河の人菅江真澄は近世後期、東北・北海道を旅し、土地の人々の暮らしや習俗を記録した。寛政期には蝦夷地（太田山・有珠山）にまで足を踏み入れ、アイヌの人々の生活文化に直に触れている。柳田國男が真澄を「親切なる平民生活の観察者」（「菅江真澄遊覧記を読む」）と評したのは正鵠を得ている。

真澄は歌人であったから、文と歌の組み合わせは当然としても、それに加えて、数多くの絵を残してくれた人であった。文・歌・絵が一体となっているのが真澄の遊覧記（日記）の特色となっている。絵にはしかも、描いた事物の一つひとつに甲乙丙…などと番号が付けられ、余白部分にその名称を記すといった、「絵引」と呼んでもよいような手法をいち早く取り入れていた（拙稿「『絵引』をする菅江真澄」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年）。

本COEプログラムの第1班は澁澤敬三が提唱した『絵巻物による日本常民生活絵引』にならって、近世・近代の生活絵引の作成を目的の一つにあげている。そのうち、近世の北海道地域（松前・蝦夷地）のアイヌおよび和人の生活文化を分担することになっている。絵引とは、描かれた一つひとつの事物に適切な名前を与えていく作業である。単純化していえばそうなのであるが、当時その土地で何と呼ばれていたのか、さらにアイヌ文化の場合にはアイヌ語の呼称・表記という問題もあって、名づけ自体が実は一番難しいことなのかもしれない。

描かれた事物についての周辺・関連情報を文字・非文字資料にかかわらず、隈なく調べ集めていくしか方途はない。むろん、名づけすればよいというものではなく、その用途や意味、背景、関係性などに十分に説き及んで、すでに失われた過去の生活文化の理解に誘うものであらねばならない。単なる物品のカタログではないからである。絵引の作業は同時に絵解の作業でもあり、そこにいろいろの発見があって、新たな研究にもつながっていく。

さいわい、真澄の絵は日記の挿絵であれば、いつどこで描かれたのかが本文の記述によってほぼわかる。加えて、前述のように真澄自身が絵引的な手法を用いていた。プロの絵師ではない素人的な絵なので、「美術」というジャンルに入れるのには抵抗の向きがあるかもしれないが、事物をありのまま記録しようとする態度は絵引の素材とするうえでは好都合である。現在、真澄の絵はモノクロ中心であるが網羅的に『菅江真澄全集』（未来社）に収録され、また主要な絵はカラーで『菅江真澄民俗図絵』（岩崎美術社）で確認することができる。インターネットで秋田県立図書館のウェブサイトにアクセスすれば当館所蔵写本のカラー画像が容易に見られる。絵の共有化という点でありがたい。

近世北日本地域の社会史、あるいは生活文化史に興味を持って、これまでも真澄の記述（文）からヒントを得てさまざま調べてみるということをしてきた。絵引を意識するようになってからは、真澄の絵からイメージをふくらませ、絵から文へ、という思考の回路が多少身についてきたように思う。

個人的体験でいうと、たとえば、真澄の絵のなかに、北海道の渡島半島西海岸の浜辺を描いた図があり、そこには本州では目慣れない円錐形の莚で周囲を囲った小屋が描かれているのが気になった。真澄はこれを「丸屋形」「円舎」（マロヤカタ・マルヤカタ・マルゴヤ）と表現している。調べていくと、近世の北海道で、アイヌの人々が生業や交易で移動するさいに持ち運ぶ簡便な住まいの用具であり、それが鯡漁や昆布刈りに出ていく和人漁民たちにも使われていたことがわかった。丸小屋の形状はアメリカの先住民などにも見られ、人類史的な興味もわく。

別に新しい発見でも何でもないが、もっぱら文から考えてきた私にとってはとても新鮮であった。絵から文へ、文から絵へという双方向の作業を行き来することによって、さまざまな可能性が開かれそうな気がする。

最終年を迎えた今年度、何らかの成果をまとめなくてはならない。完成本を出す難しさがあるので、試案本と第1班では呼んでいるが、まずは菅江真澄の絵のうちからアイヌの生活文化に関するものを取り上げて、生活絵引の試案を示すことができればと考えている。